

An Overview 解説

A history of small theater movement leading up to the present.

—— Eiko Tsuboike (Director of Institute for the Arts)

現代に繋がる小劇場演劇の流れ

—— 坪池栄子（文化科学研究所）

小劇場演劇の流れ

* 歌舞伎

異様な振る舞いや風体を指す「傾く（かぶく）」が語源。江戸初期に出雲の阿国が京都で始めた「かぶき踊り」が始まりとされる。風俗取り締まりで女芸人の出演が禁止され、女形が生まれたことにより、様式性の濃い演劇として発展。江戸で1714年からは幕府公認の劇場として興行を許されたのは、中村座・市村座・守田座の江戸三座だけであった。

* 新派

歌舞伎に対抗して発達した演劇ジャンル。明治中期に自由民権思想の宣伝のために行われた壮士芝居が始まり。次第に新聞ネタに題材をとった現代劇を上演するようになり、大正時代に入って『金色夜叉』『不如帰』で新派悲劇のスタイルを確立。

* 新劇

歌舞伎・新派劇に対抗してヨーロッパ近代劇の影響を受けて発達した演劇ジャンル。明治政府による歌舞伎の改良運動と翻訳劇の上演を目的に結成された自由劇場（1909～19）が始まり。当初は歌舞伎役者が出演していたが、1924年にヨーロッパ近代劇の上演を行う常設劇場として築地小劇場がつけられ、リアリズム演劇ができる俳優の養成を始めたのが今日の新劇の基礎となった。代表的な劇団は俳優座（1944年創立）、文学座（1937年）、民芸（1950年）。

日本の演劇界は、明治以降の世の中全体がそうであったように、急速な近代化や欧米化の流れに乗って、歌舞伎に反発して新派が生まれ、歌舞伎・新派に反発して新劇が生まれ、新劇に反発して小劇場演劇が生まれるといったように、それまでであった表現への反発を繰り返しながら、別の集団・表現をつくることで動いてきたところがある。

こうした歴史的な経緯のため、日本では一口に演劇と言っても、古典から商業演劇、小劇場演劇、教育活動として行われている高校演劇など、さまざまなジャンルが併存しており、これらの領域の間関係が希薄で、一部のプロデュース公演を除いては、ほとんど相互交流が行われていないのが現状だ。その中で現代演劇シーンを牽引しているのが、1960年代にスタートし、今も新しい才能を輩出し続けている小劇場演劇の領域である。

60年代、現代演劇を志すものは大手新劇団に入ってリアリズム演劇をやるしかなかった時代に、既存の演劇に飽き足らなかった若い演劇人たちが劇団から飛び出し、また、当時、多彩な才能を擁していた大学の学生劇団のリーダーたちが、学生運動の流れの中で、自分たちの思想を表明し、表現を追求するための小劇団を次々に旗揚げしていった。これが現代に繋がる小劇場演劇のはじまりである。

小劇場演劇は一部の例外を除いて基本的にアマチュア活動であり、多くの場合、劇作家、演出家、俳優を強烈な個性と才能をもったリーダーが兼任している。俳優を兼任しない場合は、リーダーの演劇思想を体現したカリスマ性のある特徴的な俳優が必ずいる。

こうした小劇場演劇の第一世代には、故・寺山修司、鈴木忠志（現・静岡県舞台芸術センター芸術総監督、SCOT主宰）、蜷川幸雄（現・桐朋学園芸術短期大学学長）、唐十郎（元・横浜国立大学教授、唐組主宰）、佐藤信（現・東京学芸大学教授）、太田省吾（現・京都造形芸術大学教授）、串田和美（現・まつもと市民芸術館芸術監督、日本大学芸術学部教授）など、錚々たるメンバーが顔を揃え、世界の前衛演劇をリードする勢いだった。

現在、彼らの多くは、カンパニーのリーダーとしての活動に終止符を打ち、演出家として独立した活動を行なう一方、公立劇場の芸術監督や大学の指導者という、これまで日本では第一線の演劇人が携ったことのない新しいポジションの開拓者としての重責を担っている。こうした第一世代が作りだす新しい環境が、次世代の現代演劇シーンにどのような影響を与えるか、注目されるどころだ。

第一世代の小劇場演劇は、反体制運動、反新劇運動、前衛運動といった思想的・実験性の強いもので、観客もこうした考えに賛同する同志だった。しかし、70年代に登場したつかこうへい（第二世代）が、誇りがあればどんな人間の欲望も肯定できるという自虐的なコメディのスタイルを確立して大人気となり、小劇場演劇を娯楽として楽しむ若い観客層を開拓した。それをターニングポイントにして、小劇場演

An Overview

A history of small theater movement leading up to the present.

現代に繋がる小劇場演劇の流れ

劇はその時代の若者の感性に訴えるエンタテインメントへと大きく方向を変えることになる。

80年代には、学生劇団を母体として、野田秀樹、鴻上尚史ら第三世代のリーダーが続々登場。破天荒な物語と個性豊かな演技スタイルで若い観客の支持を集め、「小劇場ブーム」としてマスコミの話題となる。90年代に入ると、それまで小劇場演劇の特徴ともなっていた非日常的なスタイルへの行き詰まりから、第四世代として、平田オリザの作品に代表されるような、日常生活に設定を求めた室内劇の流れが生まれる。

また、エンタテインメントを志向するグループからは、劇団をショービジネスとして成功させた演劇集団キャラメルボックスの成井豊、劇画タッチのSF時代活劇をシアトリカルに展開し、商業劇場にも進出した劇団 新感線（作家：中島かずき、演出家：いのうえひでのり）、職業作家として成功し、商業演劇やテレビドラマの作家としても活躍する、シチュエーションコメディの三谷幸喜、社会派コメディの永井愛などが登場。第三世代のリーダーたちも劇団を解散して商業演劇のウェルメイドな舞台に活躍の場を移すなど、現在は、小劇場演劇の世界からショービジネスや映画の作家や演出家、テレビ俳優やタレントなどの人材が次々に台頭する、一種の円熟期を迎えている。

An Overview

A history of small theater movement leading
up to the present.

現代に繋がる小劇場演劇の流れ

第五世代の登場と最新動向

90年代をリードした第四世代の中で次世代に大きな影響を与えたのが、さまざまな題材をとりながらシリアスコメディを展開しているNYLON100のケラリーノ・サンドロピッチ（作家・演出家）と、業の深い主人公たちが活躍するデフォルメされた喜劇で、野田秀樹以降の才能として最も評価の高い大人計画の松尾スズキ（作家・演出家・俳優）である。

現在、小劇場演劇シーンの担い手として活躍している60年代後半から70年代生まれの第五世代（長塚圭史、きだつよし、村上大樹、松村武、千葉雅子など）の多くは、松尾チルドレン、ケラチルドレンと呼ばれている。

こうした第五世代に共通しているのが、これまで小劇場演劇のスタイルをつくってきた集団性が極めて低いことだ。日本の小劇場演劇の特徴は、個々の劇団が排他的な集団活動の中で固有のスタイルを模索し、小劇場演劇シーン全体として舞台芸術の表現の可能性を広げてきたところにあったが、逆に言えばその集団性ゆえに、例外はあるものの、ほとんどの劇団はアマチュアから脱皮するために解散せざるをえないという宿命を背負っていた。

しかし、時代が変わり、こうした集団性に依拠しない若い劇団が多くなり、演技スタイルに格段の差もなくなったことから、近年では、小劇場演劇シーンでも劇団の枠に捕われない活動（プロデュース公演、気の合ったアーティスト同士によるユニット活動）がたくさん行われるようになってきた。

こうした背景としては、80年代末から90年代にかけて、東京都内にたくさんオープンした劇場のプログラムとして若い観客に人気のある小劇場演劇の人材を起用したプロデュース公演が行われるようになったこと、小劇場演劇の制作者やプロデューサーが劇団を解散して設立した演劇の企画・制作会社が、そうした公演の制作を担うようになったことなどがあげられる。

新世代の動向として押さえておかなければならないのが、地域演劇の興隆である。90年代後半に入り、これまで圧倒的に東京に一極集中していた小劇場演劇シーンに異変が起こり、大阪、京都から次々と新しい劇作家が台頭し、演劇界を驚かせた。それには、1985年にオープンして以来、大阪の小劇場演劇の拠点となっていた劇場、扇町ミュージアムスクエア（2003年閉館）と兵庫県伊丹市が開設した公立劇場、伊丹アイホールが果たした役割が大きい。いずれも若い演劇人のサポートに力を注ぎ、94年からはOMS戯曲賞を創設して劇作家の育成を奨励。この戯曲賞の受賞者には、松田正隆、鈴江俊郎、岩崎正裕、土田英生などが並び、松田、鈴江は時を経ずして日本の劇作家の登竜門である岸田戯曲賞を受賞している。また、90年代に日本全国に多数建設された地域の公立劇場などを足がかりにして地域演劇シーンが活性化する傾向にあり、すでに地域を拠点に活動しながら全国に通用する新しい才能も生まれてきている。

この他の小劇場演劇シーンの新しい動きとしては、ワークショップブームと小劇場のオープンラッシュの2点があげられる。ワークショップブームについては、各地に建設された公立劇場が演劇教育プログラムをスタートしたり、演劇の技能を子どもの育成などに役立てる動きがでてくるなど、これまで日本にはなかった社会的なニーズが生まれたことが大きい。小劇場演劇の演出家が自分たちの技能を作品づくり以外で発揮できる場ができたことは、今後の演劇環境を考える上で極めて大きな変化と言える。

小劇場のオープンラッシュについては、バブル崩壊を機に不動産価格が下落し、都心に空きビルなどの遊休施設が急増したのがきっかけ。現在、そうした場所を借りた小劇場がいたるところに生まれており、アマチュア活動の拠点となっている。こうした創作環境、発表環境の変化が10年後の小劇場演劇シーンをどのようなものに変えていくか、注目したいところだ。